

久米賞 佳作 受賞作品

私と陸上のスパイクと思い出

郡山市立郡山第三中学校

一足目

中学に上がって本格的に始まった部活
僕は小学生からやっていた陸上部に入った
初めて買ってもらった
真っ白なスパイク
カチ カチ カチ カチ カチ
地面をかむスパイクのピン
気持ち良かった
毎日の部活がとても楽しみになった
初めての中体連
百メートルとリレーに出場
緊張とわくわくを胸に
力いっぱい走った
結果 リレーでは市で二位になった

全身に鳥肌が走る
すがすがしい シャワーを浴びたみたいだ
これからに希望をむける
スパイクが虹色に染まった

二足目

二足目のスパイク
一年生のときの新人戦
四百メートルで六位入賞したとき
お祝いで買ってもらった
きついオフシーズン
毎日いっしょに乗り越えた
三百、二百五十、二百、百八十、
百二十メートルを三セット
つらくて、寒くてやりたくない日もあった
フラフラになりそうなきも
スパイクは足を前へ前へ運んでくれた
二年生になった自分を想像してみる
絶対活躍するぞ
前向きな熱い何かが湧いてくる
走路の雪も溶かす勢い
僕の心は前へ前へ
刻むピッチの
リズムに合わせて

三足目

三足目のスパイク
二年生のとき
本格的に種目がハードルに決まった
絶対入賞するぞ
毎日練習に励んだ
毎日できたひぎの青あざ スパイクの傷
山のように立ちはだかるハードル
歯をくいしばって
ひたすらその山にアタックした
絶対入賞するぞ

セット バン！
中体連 おもいきりとび出す僕
すべるようにとび越えゴール
前には誰もいない 結果一位
心がふわふわ 舞い上がりそうになった
ありがとう
スパイクの傷はつやつや輝いていた

四足目

四足目のスパイク
三年生になるとき買ってもらった
大きくなった足にもなじむ

初めての短距離専用のスパイク
蛍光ピンク とても目立つ色

わくわくしながら履いてみた
僕の足が輝いている
走ったときの僕は鳥
ぐいぐい前に進んでゆく
大会への意気込みも
ぐんぐん湧き上がった

感染症で大会が少ないと知った
正直がっかりした
でも、限られた中でベストをつくそう
輝くスパイクに励まされた
僕の心は熱く燃え上がった

感謝、そしてこれから

本当にありがとう
中学校三年間お世話になったスパイク
本当にありがとう
共に競った仲間
中体連 新人戦 日々の練習の思い出
お世話になった先生

本当にありがとう

毎日応援してくれた家族

けがの心配をしてくれた家族

四足のスパイクは三年間の感謝と思い出

無二の大切な仲間で一番の宝物だ

これからも陸上を続ける

これからも忘れない

先生 仲間 家族 スパイクへの感謝を

これからも一生懸命 走り続ける

(指導教諭／柳 沼 智 恵)

《作品の意図》

私は中学校三年間、陸上部に所属し、活動してきました。その中で、自分がいってきた四足のスパイクに焦点をあて、一足一足と共に作った中体連や練習などの大切な思い出について書きました。また、五編目は改めて陸上部での活動を振り返ってこみ上げてきた感謝の気持ちと、これからへの決意を書きました。

一、一足目

二、二足目

三、三足目

四、四足目

五、感謝、そしてこれから

《作品の寸評》

中学校三年間の、陸上部の活動で無くてはならない存在だったスパイクに焦点をあて、一年毎の軌跡や、スパイクと共にあったエピソードを

織り込みながら巧みに表現し、五篇の詩の作品として完結させている。陸上部の入部から三年生までの自分の成長を、スパイクの傷や、つらさの中で共に走ったスパイクの思い出と共に描く中で表現できている。一足目のスパイクは「希望」を想像させる虹色であるが、三足目ではスパイクにも傷ができる。けれど満足のいく結果と共に、その傷も「つやつやと輝く」のである。四足目の今年は、コロナ禍により十分に練習もできない。だがそのスパイクの輝きを見ながら「限られた中でベストをつくそう」と心を燃やそうとする。色彩語や、連を用いた表現など趣向を凝らし、全体を通して躍動感が感じられる作品である。最後の詩は、三年間の思いの集大成である。四足のスパイクの「四」から始まり、最後は「一番の宝物」としめくくる数字を用いた言葉の選び方にこだわった二行は見事であると共に、スパイクに対する作者の強い思いが焦点化されていて、読み手を惹き付ける。

(審査員／吉 井 美 香)